



↓ 1 第60番札所 横峰寺  
(西条南中学校区参照)



## 1 横峰寺

石鎚山北東部の深山星ヶ森に位置する四国霊場60番札所横峰寺は、白雉2年（651年）、修験道の開祖・役小角えんのおづぬの開基と伝えられる。本尊は桧造りの大日如来坐像で、金銅蔵王権現御正体こんどうざおうごんげんみしょうたい（懸仏かけほとけ）とともに平安末期の作とみられ、県の有形文化財に指定されている。

八十八ヶ所の中でも特に深山にあり、昔から難所の札所とされている。5月中旬から下旬にかけて、境内や参道沿いの斜面に鮮やかなピンク色のシャクナゲが咲き競う。



横峰寺

## 2 香園寺

四国霊場61番札所香園寺は、用明天皇の病氣平癒を祈願して、聖徳太子が開創したと伝えられる古刹こまつで、本尊は大日如来坐像。その後、大同年間（806年～810年）に弘法大師が中興した。大師が来錫の折、難産に苦しんでいる婦人を救うため、栴檀せんたんの香を焚いて祈願したところ元気な男の子が生まれたことから、「子安大師」として信仰を集めている。

境内には、平成7年に山頭火の句碑が2基建立されている。



香園寺の山頭火の句碑

## 3 香園寺奥の院の散策

昭和8年、香園寺住職・山岡瑞円和尚が奥の院を創建。本尊は不動明王で、両脇に「コンガラ」「セイタカ」二童子を従えた銅像を滝の上の岩に造設し、滝に打たれる修行の場になっている。奥の院の溪流に沿う参道は、桜・楓が植えられ、春秋には絶好のハイキングコースになる。特に紅葉は見事。滝までは、大谷池土手からは1 km、香園寺から徒歩で20分。滝の水量も多く、更衣小屋も用意されている。夏も涼しく、地域の人の憩いの場になっている。

## 4 宝寿寺

四国霊場62番札所宝寿寺は、聖武天皇の勅願により、天平年間（729年～749年）に中山川下流の白坪の地に創建されたのが起源で、金剛宝寺と呼ばれていた。

後に、弘法大師が十一面観音像を刻み本尊とし、寺名を宝寿寺と改めた。創建以来、幾度も移転したが、大正12年の国鉄開通の際に現在の位置に移転した。

寺宝・「孔雀文磬」は中国伝来の打楽器で、仏具として勤行ごんぎょうのときに使われたといわれるもので、県の有形文化財に指定されている。

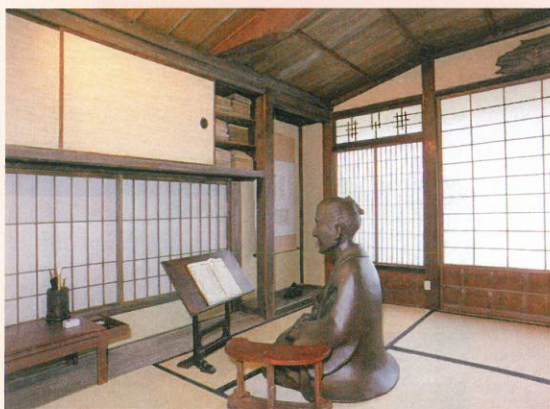


宝寿寺孔雀文磬





史跡近藤篤山旧邸正門



史跡近藤篤山旧邸書齋



小松藩陣屋跡

## 5 史跡近藤篤山旧邸と本善寺

江戸時代の朱子学者近藤篤山は、明和3年（1767年）土居町小林に生まれた。享和3年（1803年）に小松藩7代藩主頼親の師として招かれ、翌年、藩校（培達校）を整備、養正館と改称して教学の基礎を確立した。文化3年（1806年）には小松に居を定め、屋敷内に私塾、挹蒼亭・緑竹舎を設けて広く教化にあたり、「伊予聖人」と称された。

「德行天下第一」と称された儒官の生活が偲ばれる屋敷は、近藤家から旧小松町へ寄贈され、平成11年から一般公開されている。篤山邸前の聞名山本善寺は浄土宗総本山知恩院に属し、小松藩の藩寺である。本尊の阿弥陀如来像は平安末期から鎌倉初期の作で、山門の額「聞名山」（3代藩主直卿の書）とともに、市指定文化財。

境内の墓地には、延寿院殿（4代藩主頼邦の生母）や篤山の両親の墓がある。

## 6 常盤神社

天文5年（1740年）、4代藩主頼邦が町内の安寧と繁盛を祈って、福の神恵比寿・大黒二神の神殿を旧藩に再興した。

天保12年（1841年）には、8代藩主頼紹の命により東町に移築した。神殿は城下のこんぴら街道の東端、商家街を正面に見る場所に、西向きで作られた。

明治7年頃、養正館の聖廟の木材を使って改築され、大正13年には、国道を氷見方面へ真直ぐ抜くため、境内を国道に提供し、社殿を現在地に移した。

## 7 小松藩陣屋跡

小松藩一万石は、寛永13年（1636年）、一柳直頼が父の遺領から新居郡4ヶ村、周布郡11ヶ村を分与され、塚村の地に陣屋を構えたことに始まる。西条藩に隣接しており、宗家を守る砦とみられていた。陣屋は東西63間・南北100間で、周りの道路が今に残り、その規模が窺われる。太鼓櫓の跡には記念碑が残る。

すぐ南には名園「逍遙園」が天神池下の圃場整備地区内にあったが、その形跡は今は何も残っていない。その逍遙園の借景となっていた綱付山（標高550m）の嶺線が美しく、山裾を走る松山自動車道、ハイウェイオアシス、椿温泉館などの新しい公共施設と里山の風景の調和が見事である。秋の雑木の紅葉が最高で、夜景も捨てがたい。

## 8 楠陵（くすおか）天満宮と明勝寺附近の散策

小松町新屋敷字真護地、天神山の山裾にある楠陵天満宮は、小松藩3代藩主一柳直卿公が京都北野天満宮を勧請したもので、祭神は菅原道真公。

境内からの道前平野の眺望も素晴らしい。この天満宮から明勝寺、天神池界限には、自然豊かな里山風景が広がる。野鳥の宝庫でもあり、風景写生や俳句・短歌づくりには、好適地である。



## 9 石鎚山ハイウェイオアシスと椿交流館

松山自動車道沿いの高台にある石鎚山ハイウェイオアシスには、石鎚の自然が体感できる「石鎚展示室」、地域の特産品の直売所やレストラン、おみやげコーナーなどがある。「憩い」と「体験」のオアシスで、道前平野や燧灘を一望できる絶景のスポットでもある。

また、椿交流館は、燧灘を眺望しながらくつろげる、弱アルカリ性の柔らかな天然温泉である。

交流館横の椿ハウスでは、明石蓮、篤山椿、小松姫など地域独自種の椿が愛好家の手によって育てられている。3月の第1土曜日・日曜日には、老人クラブ連合会主催による「椿一輪展」が開催され、苗木の即売会なども行われる。



石鎚山ハイウェイオアシスと椿交流館

## 10 四つの辻地蔵と岡村砥石場

一柳公の陣屋を中心に、東西南北、四方位に辻地蔵があり、地域の信仰が篤い。

「東の辻地蔵」は東町の西条藩との境界（享保8年＝1723年建立）、  
「西の辻地蔵」は西町（宝暦元年＝1751年建立）、  
「北の辻地蔵」は新屋敷下組（宝暦10年＝1760年建立）にある。

「南の辻地蔵」は小松町岡村砥石場にあり、宝暦7年（1757年＝5代藩主頼寿25歳）の建立。当時の岡村砥石場は、石鎚登山や横峰寺参拝、千足村への幹線道路の基点として賑っており、このお地蔵さんは、道祖神として旅の安全などを祈っていた。また、真護地谷川で薪採りをする人々がこの地で鎌を砥いでいたことから、ここを「砥石場」と呼ぶようになった。この地名は「小松藩会所日記」にもしばしば顔を出し、歴史的にも価値のある古道といえる。



養正館跡

## 11 養正館跡と女子教育発祥の地

篤山先生の養正館では、藩士の子弟はもちろん、神官・医師・農民・商人の希望者にも聴講を許し、小松藩学風興隆の気風を作った。教授役は篤山、南海、箕山と受け継がれ、多くの有能な人材が輩出された。明治5年学制発布とともに新屋敷小学校となった。

また、小松藩士丹信積の妻、美園が安政5年（1858年）に伊予国で最初に婦女子のための寺子屋を自宅に設け、篤山先生の「四如の喩」を教育理念として子女の教育にあたった。生徒数が多くなってからは、隣の本善寺に移り、明治5年学制発布とともに「十二番女児校」として公認された。美園は訓導に補され、近代愛媛の女子初等教育の発展に大きく貢献した。

## 12 仏心寺と小松藩主一柳家墓所

仏心寺は、慶安3年（1650年）2代藩主直治により菩提寺として創設され、南明禅師をもって開山とした。歴代藩主は神仏への崇敬が厚く、特に3代藩主直卿は額字を浄書奉納した。寺内には藩政期の古文書・書跡、境内には陣屋内にあった桜門・霊屋門と会所・供侍など歴史的価値のある建造物や市指定の広葉杉、明石蓮（椿）など、数々の文化財を有し、旧小松町の宝庫といえる存在である。

歴代藩主の墓は仏心寺より南の仏心寺山にあるが、初代藩主は隣接の遠見山、7代藩主は白谷山にある。一柳氏の墓石は代々質素な一つ台の形を守っている。それは、直治が「宗家西条藩は五輪塔の墓、次兄川之江藩は笠付きの二つ台の墓、小松藩は末弟ゆえ一つ台でよい」という考え方を示し、家臣たちも藩主の墓形にならったものといわれる。



女子教育発祥の地





小松藩会所日記

### 13 温芳（おんぼう）図書館と歴史資料

小松公民館から平成7年に移転新築された温芳図書館は、昭和12年設立され、市民に親しまれてきた地域の図書館である。

2階の郷土資料室には、特定文化財11件のほか、考古から民俗資料に至るまで、数多くの収蔵品がある。「小松藩会所日記（175冊）」「小松邑志」「妙口東庄屋文書」などの古文書はもちろん、工芸品から縄文時代の土器に至る資料は貴重である。

また、前庭には篤山先生の座像が、また、館内には先生の教えを受けた小松最後の儒学者で、温芳図書館の初代館長・一柳春二先生の座像が来館者を迎えてくれる。

### 14 小松町ふるさと祭り



小松町ふるさと祭り

8月の第1土曜日と日曜日の2日間、一月遅れの七夕祭りをかねて開催される。旧小松藩のお殿様やお姫様等に扮した大名行列や、地域のグループで作った踊り連による小松音頭の盆踊りなど、多彩な催し物が繰り広げられる。

### 15 養正ヶ丘（小松高校）

小松高校が建つ養正ヶ丘は、昔から格蔵山と呼ばれ、付近一帯からは弥生時代や古墳時代の出土品が多く、古代の住居跡であったことが窺える。

学校の北側には、篤山先生一族の墓、陸軍中将黒川通軌<sup>みちのり</sup>一家の墓、小松高校の前身の子安中学の創始者・山岡瑞円師領徳碑、幕末勤皇の志士・田岡俊三郎の表忠碑がある。

麓には小松地域福祉センターもある。

### 16 陸軍中将・黒川通軌（みちのり）

黒川通軌（幼名武夫）は、天保14年（1843年）小松・岡村に生まれる。篤山先生の長子・南海先生に学び、長じて維新・討幕運動に奔走する。

明治6年には陸軍大佐に補されるが、これは薩長土肥の門閥が要職を独占していた明治初期では異例の人事といえる。西南の役の功などにより、明治18年には陸軍中将に昇格、明治20年男爵を賜り、華族に列せられた。明治26年に勲一等瑞宝章、同年、東宮武官長兼東宮大夫、学習院長。

明治30年には小松に帰郷。明治36年、享年61歳で永眠。養正ヶ丘にある墓前の石灯籠一対は、大正天皇ご即位記念に下賜されたものである。また、昭和25年の昭和天皇行幸の折、小松駅に停車され、侍従から中将の墓所があることなどをご説明申し上げたという。篤山先生を祖とする小松の学風が育てた偉人である。



養正ヶ丘



## 17 舟山古墳と三嶋神社

小松川の西、国道11号線に沿う形で東西方向にのびる丘陵を舟山古墳と呼ぶ。嘉永7年（1854年）、三嶋神社を新宮原からこの丘へ遷座するための造成に際し、巨大な円墳が掘り当てられた。石棺や人骨のほか、武具、<sup>まがたま</sup>勾玉などの副葬品が出土し、後に<sup>くだたま</sup>勾玉と管玉は東京国立博物館に納められた。

その古墳の東に位置する三嶋神社は、元明天皇の和銅5年（712年）詔勅により、国司越智玉輿、玉澄父子が井出郷（小松の古名）の総鎮守として、大山祇神社より勧請し、社殿を建立したのが始まりである。古来より、小松藩歴代藩主の崇敬が厚く、寛永15年（1638年）初代藩主直頼が本殿を再建し、3代藩主直卿が奉納した扁額と社号石や石造手水鉢などがある。現在の社殿は、嘉永7年（1854年）に、新宮原から移されたものである。

## 18 高鴨神社

社伝では、1,500年前、大和葛城山麓の<sup>おおみかみ</sup>高鴨大御神の分霊を祀ったのが始まりとされ、後に、剣山城主黒川氏が土佐高加茂大明神を勧請し、小松藩主一柳氏も崇敬した。

付近からは、磨製石包丁などの石器や土器も多く出土している。14代神主鴨重忠の日記と国学者矢野玄道<sup>うつそう</sup>来訪の地は、市指定の文化財になっている。社叢は照葉樹林が鬱蒼と繁り、数百年前の面影を今に伝えている。

## 19 飛鳥時代の寺院遺跡・法安寺

千本ボタンの寺として広く知られている法安寺は、飛鳥時代の創建といわれ、県内最古の寺院遺跡でもある。推古4年（596年）聖徳太子伊予行啓<sup>ぎょうけい</sup>と関連づけ、太子の命によって国司・越智益躬が建立したという伝説がある。遺構は四天王寺式伽藍の配置を示し、境内には塔と金堂の遺構、数十個の礎石が残されている。また周辺からは、飛鳥、白鳳、奈良、平安朝の各時代の歴史的に貴重な古代瓦が大量に出土している。昭和19年には愛媛県下における国指定史跡第1号となった。

## 20 おえのきさま

妙口都谷地区の墓地の入口に、「おえのきさま」と呼ばれるお墓がある。妙口剣山城3代城主・黒川五右衛門の姫と乳母のものと伝えられている。お墓はお堂の中に安置されており、そのお堂の入り口には、古老の言い伝えとして、次のような由来が記されている。

「天正13年（1585年）の秀吉の四国侵攻で剣山城も落城、乳母は姫を背負って城を逃れ、都谷の榎原まで来たが、敵の放った矢を背後から受け、二人は敢え無く最期を遂げた。はかない人の無情に哀れを感じた里人は、この地に二人を手厚く葬った」毎年旧暦6月7日には、部落をあげて、菩提を弔い霊を慰める行事が400年余続いている。今なお二人は都谷の守護人として、尊び親しまれている。お墓には、姫の戒名「妙昌院教文大師」、乳母の戒名「意昌院法霊大師」が刻まれている。



舟山古墳



高鴨神社



法安寺





石根郵便局

## 21 石根郵便局

国道11号線沿いの大頭の交差点附近に残る、実に堂々とした洋風構えの建築物が、大正7年に建築された旧石根郵便局である。国道11号線が前を走り、映画館やパチンコ店、酒屋や農協、飲食店に呉服屋さんいむべすくねやそひこと商店が立ち並び、丹原への分岐点にもあたる、町の中心地にあった。

## 22 石土（いしづち）神社と高灯籠

石土神社は、垂仁天皇の御代に忌部宿弥八十彦が社殿を建造し、石鎚神社とし忌部家の氏神としたことに始まる。本殿は天正元年（1573年）に建造されたしんめいづくり神明造。鳥居は6基あり、延享4年（1747年）に建立されたものは、台石、台輪を使用した珍しい鳥居である。

中世になって、石鎚山の西登山口として、石土権現を祀る。この前の道は、通称、「お山道」と呼ばれ、横峰寺を経て石鎚に至る。

昭和6年（1931年）の神社式年祭にあたって、当時の宮司がコンクリート製の高灯籠を建設し、お山道を照らした。古くは燈明、次は電球、現在は電球型蛍光灯と形を変えながら、今なお常夜灯としての機能を保ち、毎夜点灯されている。平成13年文化財建造物に登録。



石土神社の高灯籠

## 23 妙雲寺

石鉄山妙雲寺は、横峰寺の前札、石鎚登山者の礼拝所となっている。天文7年（1538年）、剣山城主黒川氏はこの寺に蔵王権現像を奉納した。小松藩主一柳家もこの寺を尊崇し、第3代直卿公は「蔵王宮」の額を奉納している。

本堂は、昭和51年に香園寺の旧本堂を移築したもの。また、地藏堂は奥途中之川から移転し、地藏尊石像は地藏谷から出土したものと伝えられている。

## 24 香積（こうじゃく）寺

山号を妙喜山と称し、臨済宗妙心寺派、本尊は薬師如来。鎌倉時代の創建で、九鸞和尚による開山という。天正の頃、剣山城主黒川美濃守通博の室が妙寿尼と号して、この寺に住んだと伝えられる。天正13年（1585年）黒川氏は滅亡し、寺は衰亡し小庵になっていく。堂内には美濃守通博と妙寿尼の位牌が祀られ、境内には黒川一族の墳墓が数基残る。



妙雲寺蔵王宮扁額



## 25 天福寺

西大頭の11号線から少し南に入った山裾にある天福寺は、山号を獅吼山しゅうこうざんと称し、本尊を釈迦如来とする曹洞宗の寺院。開創年代は不詳であるが、獅子ヶ鼻城城主宇野氏の菩提寺である。天正の陣で城主宇野隼人正識弘が戦死したのを悼み、慶長元年（1596年）、兄の宇野民部少輔家綱が再興した。もとは大頭の信号北辺りにあったが、焼失し、享保3年（1718年）現在の場所に再建された。第3代小松藩主一柳直卿は、山号を獅吼山と改め、扁額を寄進した。

また、西山興隆寺などと比べるとあまり知られていないが、その美しさならば決して引けをとらないのが、天福寺のモミジである。初夏の頃は、赤と白のツツジも見事。

## 26 織田子青（しせい）童謡碑

織田子青は明治29年妙口に生まれ、本名は源九郎、今治に住んだ。書家であり、児童文学・童謡・絵画・俳句・和歌・漢詩・孔版・印刻などにも秀でていた。書神会を組織し、月刊「書神」「学園書神」を刊行し、併せて1万5千部を発行した。多くの著書を持ち、勲5等瑞宝章。周桑以北の各小中学校に、揮毫した扁額きごうを寄贈した。石根小学校校庭に、先生の名作「夏のあくび」の童謡碑がある。真夏の昼下がりのうだるような様が、対象を擬人化して、奇知とユーモアで、品よく、素朴に大らかに描き出されている。

「夏があくびをしているようだ 桐のひろ葉がだるそうにさよらさよらとゆれている 夏のあくびは七十五日の長い長いと畑の芋はだるくてねむくてゆれている 夏が畑であくびをしている 子青七十三」 碑の裏面には、この詩のエピソードなどが記されている。

## 27 郷土カルタ

石根地区の歴史をまとめたカルタを使った「郷土カルタ大会」が、毎年1月に石根小学校で開催される。郷土の歴史を大切に伝えていこうという面白い取り組み。



天福寺



織田子青童謡碑



郷土カルタ





石根古墳群

## 28 石根古墳群

明治40年頃には明穂から西大頭にかけてはおよそ50基の古墳があったと、「周桑郷土研究彙報」は伝えている。しかし、次々と取り壊され、今は5基を残すのみである。6世紀から7世紀の豪族の墓で、横穴式石室を持つ。田の中にあるため封土を失い、石室が露出している。

うち、五号墳はこれらの中では最も規模が大きく、平成13年の芸予地震で玄門が崩壊したが、町の教育委員会の手で修復された。石根のシンボルといってもいい。三号墳は最も墳丘の姿が良いとされていたが、玄門の石もなくなり、墳丘も低くなってしまった。一号墳には「椀貸し伝説」が残っている。土に埋まっているためか、墳丘は見え、天井石が2,3個現れているのみであった。耕地整理に先立ち、平成17年に市の発掘調査が行われ、周溝の存在が確認され、現状保存が決定した。道前地方の開拓者としての祖先の偉業を後世に伝えていくためにも、その記念塔として、ほどよく保存していきたいものである。



明穂遺跡群

## 29 明穂遺跡群

明穂南方段丘の上にある。東岡1・2、中ノ岡3の3ヶ所があり、広さ6,000㎡にも及ぶ広大な遺跡群である。特に、東岡遺跡では後期旧石器時代のサヌカイト製ナイフ形石器（約2万年前）や、縄文時代草創期の有舌尖頭器（約1万2千年前）等が採取された。四国縦貫自動車道の建設に伴う発掘調査の結果、弥生時代中期後半とされる土器・石器なども大量に出土し、住居跡などの遺構も検出された。あわせて、中世の土器等の遺物や柱穴などの遺構も確認されたことから、この遺跡群は旧石器時代から中世に至るまでの複合遺跡で、良好な保存状態にあるといえる。

## 30 興雲寺

金龍山興雲寺は、大宝2年（702年）の開基で、一時、明穂の三嶋神社を司宰し、現存の仏堂には三嶋神社から遷座した本地仏が祀られている。

安井にあった末寺禪乗寺は松本豊後守の開基で、過去帳が今に残っている。山門左側には、天保（1830～1844）以前の作とされる露座の地藏菩薩が鎮座する。古文書は軸にしてまとめられ、開基縁起などが数多く保存されている。



興雲寺

## 31 齒神さん

享禄年間（1528年～1532年）、安井村南方に松本豊後守頼全という地方豪族がいた。千足村の黒川元春に攻め滅ぼされるまで、権勢を振るった期間は短かったが、安井谷川沿い一帯に、城館跡など多くの遺跡が残っている。

そのうち、安井地区の西南の段丘上の柿畑の中には、松本豊後守後室の墓がある。約1.8mの自然石を積み上げた上に、墓石と小さな祠が寄り添って建っている。豊後守後室は生前、歯の病で難儀されたので、末期の誓に「世の歯を病める人を救う」ことを誓願して逝去されたという。その後、後室を尊崇していた村人たちが、いつとはなしに墓を歯の神様（歯神さん）として、祭祀するようになったと伝えられている。祭祀日は旧暦11月で村の年中行事となっている。